

# 映画鑑賞入門 / 1

あなたは年間何本くらい映画を見ますか？

私はせいぜい数十本ですが、今はいつでもどの時代の作品でも DVD で見ることができますから、多い人は200本くらいは見ているんじゃないでしょうか。

映画館が特殊な場所でそこに行かなければ映画を見ることができなかつた時代から、本と同じように封切（新刊書）＋ライブラリーという時代になったのです。でもそのように大きく受容環境が変化したのに、見た映画を自分の中のどの位置にどういう順番で刻んでいくか、つまり自分の「映画感」をどのように構築するかについては、あまり模索されてこなかったように思います。

しかし、受容環境が変われば見方も変わります。

そこで現在の受容体験を考えてみると、ある方向が見えてきます。それは「膨大過ぎ、自由過ぎ」です。

現在は過去の作品でも、めぼしいものはDVD化されています。そのすべてを見るわけにはいかないし、主だった映画だけ見たとしても、全体像を把握するのが難しい時代です。映画館だったら新作が次々と公開されていきますし、名画座ではある種のテーマがあります。何年か映画を見続ければ、同時代の映画を感じ、それを手がかりに受容体験を深めることができます。

しかし、ライブラリー化したビデオ店では分類方法が定まっておらず、連続性が絶たれてアイウエオ順に並んだDVDからは監督やジャンル以外には「手がかり」が見えないのです。そしてさらに問題なのは、それで不便かということと不便ではないということです。検索エンジンが優秀なので情報はすぐに調べることができます。つまり、自分はあたかも映画をたくさん見て自分なりの映画感を持っている人間のようにふるまえるのです。しかしこれは記憶中枢がネ

ット上に出て行ってしまった人間のような状態です。「感じるだけで良い」というお子ちゃま的な扱いをされているわけです。これでは、それぞれの人が、自分の出会った乏しい映画を並べて狭い映画感を作るしかないでしょうし、ハイロのような情報化されていない映画に出会うと、はみ出してしまおうでしょう。

もう一点の「自由」で言うと、今の映画評の多くは、文脈から離れて観た人が自由に価値を作り出すのだという考えです。この「受け手による再構築」という視点は、映画に限らず音楽や文学など今の受容体験としてはむしろ主流でしょう。

この考え方は、いわゆるポストモダン以後、つまり、一通り知っている人たちがそれまでの価値を否定するという形で出てきたものです。この見方は、無知の輩とインテリが同じ土俵で語りあえるという、とても便利な一面を持っていたので、メディアなどで多用されて定番となりました。

しかし、これではいつまでたっても子供っぽい受容体験、感受性はあるが理解力や記憶力がない、という地点から抜けられませんが、面白い、怖い、笑った、とは言えるが、どのように評価していいかわからないという観客が増えるのです。

そこから出ていくには、まずは初歩的なところから、見た映画の関係性を考えるあたりから始めることです。

たくさんの映画同士の関係性をとらえるためには昔から2つの視点、時間軸にそった視点と、空間的な視点がありました。

時間軸に沿った視点では、ある作家の作風の変化や作品同士の関係を見ます。また、ある作品が過去の別の作家に影響を受けているという関係もこうした通時的な視点から考えられます。クリント・イーストウッドの「グラン・トリノ」を見た後、過去へとたどって「ハートブレイク・リッジ」や「許されざる者」へと戻していくといった感じですが。また別の作家との関係では「ハートブレイク・リッジ」と、同じ設定・展

### ～積極的な誤読のすすめ～

開の「特攻大作戦」をネットや文献などで発見するのも楽しいです。実験映画好きのハイロメンバーとしては、マヤ・デレンの「午後の網目」もDVD化されていますので、そのあたりとハイロ作品を比較するなど面白いと思います。

もう一つの空間的な視点は、時間軸のある一点で横のつながりを見る視点です。同時代の作家同士が影響しあったり、近いテーマや作風の映画を作るという現象です。ヌーベルバーグなどのムーブメントがそうですが、時代や社会状況など幅広い分析ができておもしろいです。そういえば、そういったムーブメントが見えにくくなっている、というのは逆に今の時代の特徴とも言えるのではないのでしょうか。

この2つは当たり前のように、今では意外と行われていない並べ方です。もう一度トライしてみてもいいんじゃないかと思えます。

もう一つのアドバイスは、あえて「積極的な誤読」をしよう、ということです。受身で作品を見るのではなく、その回りや背後にある作品や作家、時代を探っていく姿勢を持とう。それが間違っているでもOK。とにかく気になったらそこから「次の場所」をたどっていきましょう。ということです。  
(つづく)

前回は、情報社会の中で映像の受容体験が断片的になっていて、自分なりの映画感を構築できない人が増えている。自分なりの映画感を作っていくにはオーソドックスだが時間的、空間的に体系づけて観ていくことが重要では？という話でした。そして、もう一つの方法として「積極的な誤読」というアクションをお勧めしました。

「積極的な誤読」とはどういうことでしょうか。まず誤読とは、作者の意図する本来の意味を取り違えて作品の内容を理解することなのですが、その原因はいくつかあります。ある言葉が自分にとって本来とは別の意味や価値を持っていた時、そこから作品の受け取り方が変わってしまう、ということ。これは「感覚的な誤読」です。また、引用した文章の原典を知らなかったり、その作者が影響を受けた過去の作家を読んでいなくて、ある表現が意味するところを読み間違えるということがよくあります。これは「経験的な誤読」とも言えます。身近な例だと、テレビで料理を知らない人がピント外れな感想を言っているのを見かけますが、あれです。

しかし誤読は全部ダメかといえばそうでもありません。まず、世の中が情報過多になって本物を見つけにくい、いわば誤読を避けることの方が難しくなっている。そんな中で誤読をしないように原典をたどってばかりいると、かえって本筋を見失ってしまう。いわば評論家の落とし穴です。昔、「エリートは間違えるのが怖くてホントのことが言えない」と言った人がいましたが、そんな感じかもしれません。それに対して誤読をポジティブにとらえると、読み間違えることで新しい価値や解釈が生まれる。ひいては思想の組み換えを起こすものともとらえられるわけです。ですから、「積極的

な誤読」とは、敢えて誤読に飛びこむということですが。

しかしもう少し考えてみると、積極的な誤読は思想の組み換えなどというカッコ良いものではなく、むしろ拍子抜けするような間違い、ズレであることが多い気がします。たとえば「プリン+醤油=ウニ」のようなものです。対立や否定などとは違う、もっと遠くに飛んで行ってしまふような突拍子もない間違いのような気がします。

しかし、その脱力感こそが通常のセオリーや歴史の文脈からは決して生まれえない可能性ではないかと思えます。先日ほしの先生の太鼓公演を見に行ったのですが、そこにも「積極的な誤読」と思われるものがありました。若手の太鼓打ち達が作ったオリジナル曲は、従来の太鼓のセオリー、さらに音楽の文脈からも外れていて、でも昔の舞楽を彷彿させるような素朴なリズムがありました。コンサートではとても人気があるそうです。これも誤読ムーブメントと言えるんじゃないでしょうか。

こうした若手による誤読は、いろんな表現の場所で同時に起こっている

マヤ・デレン『午後の編み目』より　　るんだと思えます。今後、昔の映画監督を誤読して新しいジャンプを見せてくれる作家がたくさん出てくるのではないのでしょうか。マヤ・デレンやケネス・アンガー、ブラッケージなど高度な象徴性を持った作家などは、かえって誤読しやすいかもしれません。音楽PVなどはビジュアル面のコピーが多いのですが、もっと思い切った読み間違いが楽しみです。

ただここで一つだけ釘を刺しておくと、「作らない誤読は単なる無知」ということです。誤読は積極的に行ってこそ初めて価値になる。そして、こうした後先考えないアクションの中からこそ可能性が生まれる

のです。ハイロがかかげる「実験」とは常に変化を求めてトライすることです。

そして何よりも「実験」は「発見」であるべきなのです。

## 映画鑑賞入門 3

～見てから作るか？作りながら見るか？～

映画鑑賞入門も3回目。前回は映画を積極的に誤読することの価値、そして危険を取り上げました。そして最後に「作らない誤読は単なる無知」とまとめました。

映画鑑賞入門なのに作るとは、どういうこと？と思われたかもしれません。でも、映画を見ることと作ることは密接な関係があります。

映画を受容するとき、読解力や理解力が高まるにつれ、高度な表現を理解できるようになります。そうしたリテラシーの向上はしばしば螺旋に例えられます。同じような映像を見ても、「映像に何があるか理解できる」から「その映像が表わすストーリーを理解できる」「その映像が表現された社会的背景を理解できる」「その映像に込められた作者の意図を理解できる」など、様々な位相で理解することが考えられます。そのつど、受容体験としては次のステージに入っていくと考えられます。

そして、もう一つの螺旋は表現力のスパイラルです。表現力も「映像で何かを表現できる」から「映像でストーリーを表現できる」「抽象的な概念を表現できる」などステップがあります。

この見ることのスパイラルと、作るもののスパイラルは、いわば二重螺旋のような

関係です。裏表のように「理解できる」—「表現できる」と対になるセットがあります。この二つの螺旋の上に行けば、より豊かな映像体験ができるというわけです。

しかし、この二重螺旋が分かりにくいのは、対のセットは実は対ではない、ということです。たとえばスパイラルの上部まで受容能力が上がってきたとしても、表現のスパイラルに入ったとたん振り出しに入ってしまうことがあるのです。たくさんの作品を見て鋭く批評している人でも、作品を作るとつまらないということは良く聞きます。逆もよくあります。これが、映画の難しさでもあり魅力なのです。しかし、なぜこのギャップは生まれるのでしょうか。そして、それを埋めるものは何でしょうか？

ここで素朴な疑問を浮かべてみます。映画を見る人は、なぜ見るのでしょうか。

自分の楽しみのため？何かを得るため？でも、本当にそうでしょうか？映画を見るとき自分が映画を作っているのだ、とは考えられないでしょうか？

もし、映画を見ることが単に目的であって、そこに自分の体験しか求めないのならば、受容能力が上がっても、その人が表現のスパイラルに入った時に、ゼロから始めるしかないのは明らかな気がします。しかし、もし、自分は作っているんだ。そう考えることができ、そのように見ることができていたなら、受容スパイラルから表現スパイラルに入った時に、すぐに「作れる」ようになるのではないのでしょうか。

では、実際に作る＝見るとはどのような体験となるのでしょうか。そこにもいろいろな位相があるとは思いますが、しかし、一つ単純化して言うなら、作品を見ながら違うことを考える、ではないかと思えます。作品から触発されて、自分の中の想像力や思考力が動き出すような体験。非常にパーソナルな体験です。

そして、これは難しいことではなく、意外と今の若い人はできているのかと思う時があります。私は今、映像とは無縁の文系学生を教えています。映像を作らせると

驚くほど上手に作ります。自分の生まれた時の姿もビデオで残っている世代は、映像を身近に感じ、見ることと作ることの距離も近づいているのかもしれない。

この受容体験の質の変化には、新しい可能性を感じています。きっちりと見ていくことが、きっちりと作ることにつながり、創造的に見ることが創造的に作ることにつながるのです。見て終わりではなく、見ながら作り、作りながら見る。碑文谷映像派への道はこの辺りからではないでしょうか。



ケネス・アンガー『スコルピオ・ライジング』より